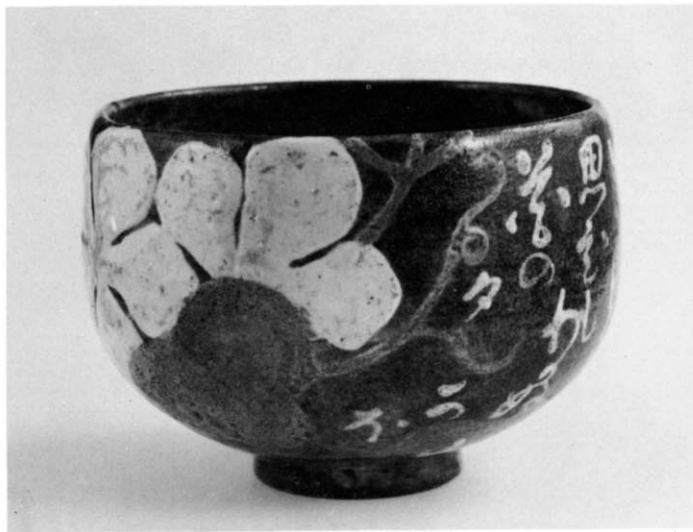




夕顔茶碗 尾形乾山（1663—1743）作 高9.5cm 口径13.0cm

乾山はあの哀艶なる平安朝の物語、源氏夕顔の巻に、特別に心を動かされていたか、実に立派な名器を作ったものである。あたかも大ぶりで茫漠たる感じを持つ黒茶碗を乾山は夏の夜の闇に見立てたが如く、その上に大輪の白い夕顔花三つ・緑広葉がからまる蔓の間からほのぼのと浮き出るように描いたのである。花をとりまく、何という微妙に柔かい黒色であろう。仁清黒の上に白釉が薄く溶けて流れかかり、一面に淡いむらむらを生じた味わいは、煙るが如き夏の夕闇か、但しはまた、白い花が夜の色に滲み出したか。その黒地の上に白釉で自作の歌が散らし書かれてあるのも、黒地を柔げる灰白さの分散を意図した為もあったのであろうか。文字は乾山一流の風格ある文字。

よりてだに露の光りやいかにも思ひもわかぬ花の夕がほ 乾山

涼しい夏の夕方からほんのりと咲き出す夕顔の花は不思議に情の籠った花であり、また夜の色を大模様に彩る見事な図案的な花である。乾山は幾度も夕顔を描いているが、それらは多く写実的であって、案外面白くない。それは、夕顔の花の魅力というものが、花それ自身の形の面白さというよりも、むしろその花が黒い夜を背景として、ぽっかりと浮き出すように咲く風情そのものに、あるからであろう。絵画では、黒い色を思うように黒く現わしにくい。そこで、乾山は黒色をいくらでも強く出し得る陶器に着眼し、それを彼一流の大胆さを以って、試みたのであ

大和文華館蒐集ものがたり⑦

乾山の夕顔茶碗

大和文華館々長 矢代幸雄

ったろう。乾山の茶碗は、彼の脱俗無拘泥な人柄が想像させるような、大きい気分のするものは、実は案外に少く、むしろ小まとまりに纏った殆んど洒落た感じのするものが相当にあり、彼らしい放膽さは、むしろその上に書きつけられた彼の書や画に見られるようである。

私は、この夕顔茶碗が、技術的には甚だ仁清風であることを認めながら、乾山作としては例外的に大きく、また大きい気分のするのを見て、ふと光悦茶碗に想到し、特に、例えば、その名作「毘沙門堂」の如き堂々たる姿を、眼前に髣髴するのも、決して無理ではあるまい、と思うのである。乾山が製陶の上で光悦の感化を受けたことは、容易に考えられる。そう思って見れば、この大掘みに図案化された夕顔の花や葉や蔓の取扱いにも、普通の乾山の草花図が案外細かく写実風であるのに比べて、この夕顔茶碗は、一時代前のおっとりとして大きい気分のある宗達風に多少通ずるものがなくもないように私には思われる。しかしこの際、宗達まで連想するは、思い過ぎであろうにしても、この茶碗の稀有なる威容には、光悦茶碗の或る面影を想像させるものがあり、乾山の人物には確に大光悦に共鳴し傾倒する一面があったらうと思うにつけても、乾山は仁清式の精技に励むかたわら、また光悦の大きさを慕う折々もあったであろう、と私などは、秘かに解釈しているのである。

この名碗を見るにつけて、私に切実なる気持をもって思い出されることは、つい今年の春、思いがけなく亡くなった甚だ眼性がよかった美術商瀬津伊之助君が、初めてこの茶碗を私に見せた時のことである。彼はこの茶碗を容易には人に見せなかったらしく、或る日、私と彼と二人だけになった時、彼は「ちょっとお目にかけたいものがありますので」という。私は何事かと思っていると、彼はこの茶碗を持ち出して来たのであった。そして箱をあけて中から夕顔茶碗を取り出して、私に見せたのであったが、私は彼のその時の卒直にそれが好きで好きで仕様がなという表情と、またそれに自信を充分に持っているという截然たる態度から、私にも真剣なるものが伝わって来たようであった。美術商や骨董商には、もちろん利益の追求が商売上の目的に相違ないけれども、それよりも奥に、もう一つ真の信念なるものがなければ、本当のことは出来ない、と私はつくづくとその時思わされたのであった。

季刊 美のたより No.11

昭和44年10月1日

発行 大和文華館